

Nara Women's University Digital Information Repository

Title	『万葉集』に詠まれた古都
Author(s)	奥村, 和美
Citation	奥村和美：都城制研究（6）都城の廃絶とその後, p. 111-120
Issue Date	2012-03
Description	
URL	http://hdl.handle.net/10935/3517
Textversion	publisher

This document is downloaded at: 2019-01-16T09:00:01Z

『萬葉集』に詠まれた古都

奥村 和美（奈良女子大学）

はじめに

『萬葉集』において人麻呂の近江荒都歌以降、かつて都であったところすなわち古都というものが歌の主題として成立する。遷都にあたって新都に予祝の歌が求められるその裏面で、古都に対しても失われたものへの鎮魂の歌が必要とされるようになる。それはまた、新都における天皇の治世の根拠を、以前の天皇の御代にさかのぼって確認しようとする行為でもある。

いま集中で古都を扱った歌を、便宜的に都ごとに分けて歌番号によって掲げると以下のようになる。

【近江宮】

卷1・29～31 柿本人麻呂作歌「過_レ近江荒都_ニ時_ニ」

卷1・32～33 高市古人「感_レ傷近江旧堵_ニ」

卷3・266 柿本人麻呂作歌

卷3・305 高市黒人「近江旧都歌」

【明日香清御原宮】

卷1・78 長屋王「從_レ藤原宮_ニ遷_レ于寧楽宮_ニ時_ニ」

卷3・324～325 山部赤人「登_レ神岳_ニ」

卷3・268 長屋王「故郷歌」

卷3・333～334 大伴旅人

卷4・609 笠女郎「贈_レ大伴宿祢家持_ニ」

卷4・626 八代女王「獻_レ天皇_ニ」

卷4・723 大伴坂上女郎「賜_レ留宅女子大嬢_ニ」

卷4・775 大伴家持「贈_レ紀女郎_ニ」

卷6・969～970 大伴旅人「在_レ寧楽家_ニ思_レ故郷_ニ歌」

卷6・992 大伴坂上郎女「詠_レ元興寺之里_ニ歌」

卷7・1125～1126 「思_レ故郷_ニ」

卷8・1506 大伴田村大嬢「与_レ妹坂上大嬢_ニ歌」夏相聞

卷8・1557～1559 丹比国人・沙弥尼等「故郷豊浦寺之尼私房宴歌」秋雑歌

卷10・1937 「詠_レ鳥」夏雑歌

卷10・1971 「詠_レ花」夏雑歌

卷10・2216 「詠_レ黄葉_ニ」秋雑歌

卷 11・2560 正述_二心緒_一

卷 13・3231 雑歌

【難波宮】

卷 3・312 藤原宇合「改_二造難波堵_一之時」

卷 6・928～930 笠金村「幸_二于難波宮_一時」

【藤原宮】

卷 3・257～260 鴨足人「香具山歌」

卷 10・2289 「寄_レ花」秋相聞

【寧樂宮】

卷 6・1038 高丘河内

卷 6・1044～1046 「傷_二惜寧樂京荒墟_一」

卷 6・1047～1049 田辺福麻呂歌集「悲_二寧良故郷_一」

卷 8・1604 大原今城「傷_二惜寧良故郷_一」秋雑歌

卷 17・3916～3921 大伴家持「独居_二於平城故郷旧宅_一」

【久迹宮】

卷 6・1059～1061 田辺福麻呂歌集「悲_二傷三香原荒墟_一」

明日香清御原宮の例が多いのは、平城京遷都以降そこがしばしばフルサトと呼ばれた(1)、その例を含めたため、中には特に古都を主題とするわけではない歌も混じる。これらの歌では大別して、フルサトの例も含めて古都について古ル・古シと表現する場合と、荒ルと表現する場合との二通りの表現のしかたがある。古ルは、基本的には、年月が経過するという意であり、その状態を表す古シは『時代別国語大辞典 上代篇』が「年月を経てなれ親しんだ、という意のこめられることが多い」と説明するように、古ル・古シは決して否定的な評価のみを示すものではない。フルサトがまさにそうで、「故郷」の翻訳語と見られるフルサト(2)は、フルに年月の経過の意とともにもと居た所への懐かしさを含みもつ。一方、荒ルは、人の手の加わっていない自然の状態に戻ることをいう。たとえば、人麻呂の近江荒都歌に見える「春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる」という状態がそれである。荒れ果ててもとの自然の状態に還ることは、文化的価値を失うことを意味する。それに対して、古ルびたもの古キものは、年月の経過とともに或る価値—現在を成り立たせる根拠の見出されることがある。それがイニシヘである。このような古ル・古シと荒ルの違いを端的に示すのが次の高市古人の「感_二傷近江旧堵_一作歌」の二首である

(3)。

古^{いにしへの} 人に我あれや 楽浪の 故京^{ふるきみやこ}を見れば悲しき (巻1・32)

楽浪の 国つ御神の うらさびて 荒有都^{あれたるみやこ} 見れば悲しも (巻1・33)

どちらの歌も「見れば悲し」という結句をもつ。前者は、「古き都」を見て悲嘆に包まれることを、「古き都」のもつ価値的なものすなわちイニシへの共感のゆえだろうかと解する。それに対して、後者は、「荒れたる都」を見て引き起こされる悲嘆を、都が荒廃して価値を失っていくことすなわち国つ神の靈威が無くなっていく、その喪失感として表現している。

1.

このような古都を詠む歌の中で、次の赤人の明日香清御原宮を詠んだ歌に注目したい(後の論述のため、長歌は段落に区切ってABCの符号を付して掲げる)。

登^{のぼ}神岳^{かみ}、山部宿禰赤人作歌一首 并短歌

A三諸の 神奈備山に 五百枝さし しじに生ひたる つがの木の いや継ぎ継ぎ
に 玉かづら 絶ゆることなく ありつつも 止まず通はむ 明日香の 古き都は
B山高み 川とほしろし 春の日は 山し見が欲し 秋の夜は 川しさやけし 朝
雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづは騒く C見るごとに 音のみし泣かゆ 古思へ
ば (巻3・324)

反歌

明日香川 川淀去らず 立つ霧の 思ひ過ぐべき 恋にあらなくに (巻3・325)

長歌の古都明日香を提示するところには「明日香の 旧京師^{ふるきみやこ}」とある。しかし歌の中には年月が経過した様は詠まれずまた荒廃した様も詠まれていない。その一方で長歌末尾では「音のみし泣かゆ 古^{いにしへの}思へば」と懐古の念をはっきりと打ち出し長歌全体を悲嘆の情でまとめている。

ここで赤人が古都の変化する姿を詠まないことにどのような意味があるのか。そしてそこにある懐古の内実はどのようなものか。これらの点について長歌を中心に考察してみたい。

長歌は三段に分かれる。Aは冒頭の「三諸の」から「古き都は」までで、主題となる古都明日香を提示する。Bは「山高み」から「かはづは騒く」までで、古都明日香の景を具体的に描写する。Cは「見るごとに」から最後の「古思へば」までで、ABを承けてそれらを見ることによって喚起される情を表現する。

このABCの各段を、詠まれている時間に着目すれば、Aが「止まず通はむ」と将来にわたる奉仕の誓いを述べ、Bが現在の明日香の姿を描き、Cが「古^{いにしへの}」という過去に思い

を馳せる。未来から現在へ、現在から過去へと時間を逆行する流れをもつ。これは、赤人の有名な不尽山歌をちょうど後ろからたどっていく展開である。段落ごとにa b cの符号を付して次に掲げる。

a 天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原
振り放け見れば b 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行
きはばかり 時じくそ 雪は降りける c 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺
は (巻3・317 山部赤人「望_不尽山_歌」)

aは「天地の 分れし時」という天地剖判の時から歌い起こし、bはその過去から現在も変わらぬ不尽山の姿を描き、cは将来にわたる誓いを述べる。この不尽山歌が過去から現在そして未来へというように時間の流れにそって順当な展開をとるのに対して、古都明日香を詠む歌は時間の流れを逆行していて、その点に明確に作為を感じさせる。

もちろんよく似た冒頭部をもつ笠金村の吉野行幸従駕歌(4)も、全体としては同様の展開をもつ。段落ごとにABCの符号を付して掲げる。

A 瀧の上の 三船の山に みづ枝さし しじに生ひたる とがの木の いや継ぎ継
ぎに 万代に かくし知らさむ み吉野の 秋津の宮は B 神からか 貴くあるら
む 国からか 見が欲しからむ C 山川を 清みさやけみ うべし神代ゆ 定めけ
らしも (巻6・907 笠金村 養老七年五月)

Aが「万代に かくし知らさむ」と将来にわたる皇統による統治を予祝し、Bが現在の吉野の姿を描き、Cがその現在のありようを基に「神代」という過去に思いを馳せる。赤人歌との先後関係は定かでないが、未来現在過去と逆行するこの構成から見ても影響関係があることは確かである。そのような両者の密接な関係にあつて、赤人歌は金村歌と異なり末尾に倒置によって「古^{いにしへ}思へば」の一句を置いており、時間の流れを逆行して「古^{いにしへ}」という一点に帰着せしめようという作為が見てとれる。人麻呂の阿騎野遊獵歌の末尾「草枕 旅宿りせず 古^{いにしへ}昔思ひて」(巻1・45)の「古昔思ひて」にも通じるような、歌全体を「古^{いにしへ}」に収斂させようとする作為である。したがって、この「古^{いにしへ}」は単に何十年前前に明日香が都であった時を指すのではない。不尽山歌のaの「天地の 分れし時」という神話的過去に匹敵するような時、赤人にとって未来と現在の都のありようを決定づけた始原の時を意味しなくてはならない(第4節後述)。

2.

従来、赤人歌の景の叙述のしかたは清水克彦氏によって、大きく見レバ型と八型とに分けて捉えられている。景の叙述に入るときに、見ルという行為の対象としてその場所を提示してから入る見レバ型と、その場所を直接に提示して入る八型との二つである。見レバ型は、国見歌の様式を継いだ伝統的な型であるのに対して、八型は赤人がその伝統をうち破り、より客観的な景の叙述をするために切り開いた新しい型である、と清水氏は言われ

る(5)。これによると古都明日香を詠む歌はAの最後に「明日香の 古き都は」とあるから八型に分類されるのだが、景を描写したあとCの最初に「^{みるごとに}毎見」とあることは見過ごすことはできない。八で提示したものを後で再び見ルで承けることは、赤人の吉野讚歌(巻6・1005)にも「吉野の宮者……神さびて 見者貴く 宜しなへ 見者さやけし」のように見られる。ただし、この「見るごとに」は題詞に「登_二神岳_一」とあることと関わる。「登_二神岳_一」というように高所に登ってそこから国土を眺めることは国見の様式を継ぐものであり、その中での見ル行為は単に風景を見ることにとどまらない呪的な意味をもつ。つまり、表面的には確かに八型に分類されるけれども、内実は見レバ型の一変形として捉えられるということである(6)。

では「見るごとに」はどのようなものの見方なのか。ここで「見るごとに」は「音のみし泣かゆ」にかかる。「見るごとに」は、「見る」行為の反復を表して、見るたびごとにの意。集中「見るごとに一音のみし泣かゆ」の形式をとるものはもう二例ある。

……他夫の 馬より行くに 己夫し 徒歩より行けば ^{みるごとに}毎見 哭耳之所泣 そ
こ思ふに 心し痛し……(巻13・3314 問答)

大君の 継ぎて見すらし 高円の 野辺美流其等尔 祢能未之奈加由

(巻20・4510 甘南備伊香真人「各思_二高円離宮処_一作歌」)

前者は、山城からの道を自分の夫が徒歩で行くのをみると、そのたびごとに貧しさがかえりみられて夫が不憫でしかたない、というもの。後者は、聖武の没後、離宮のあった高円宮を想像して詠んだ歌で、高円宮の野辺を見ると、そのたびごとに聖武のことが偲ばれて泣けてくるというもの。囑目の景から故人への思慕の情が喚起されるという、この後者の例が赤人歌の例に近い。次に挙げる挽歌も、「見るごとに」のかかる句に違いはあるが意味形式はほぼ同様である。

我妹子が 植ゑし梅の木 ^{みるごとに}毎見 心むせつつ 涙し流る

(巻3・453 大伴旅人 亡妻挽歌)

佐保山に たなびく霞 ^{みるごとに}毎見 妹を思ひ出で 泣かぬ日はなし

(巻3・473 大伴家持 亡妾挽歌)

前者の旅人の歌は亡妻の植えた梅の木を見るとそのたびごとに妻のことが思われて涙が流れると言う。後者の家持の歌は前者の旅人の歌を意識して、埋葬地の佐保山の霞を見るとそのたびごとに亡妾が思われて泣かない日はないと言う。したがって、赤人歌の場合も明日香の景を見て失われたものへの思慕の情が引き起こされて泣けてくると言っていると解される。「音のみし泣かゆ」は、ここでは明らかに挽歌的な悲哀の情を表す。つまり、この「見るごとに」の「見る」は、囑目の景を、失われたものを偲ぶよすがとして見るといふものの見方である。

さらにこの「見るごとに」は、「古思へば」とも呼応している。倒置をもとに戻すと「見るごとに 古思へば 音のみし泣かゆ」という順序になる。ただし「見るごとに一思ほゆ」

ではなく「見るごとに一思ふ」であることには注意が必要である。というのも、諸注釈を見ると、この「思ふ」を「思ほゆ」と同様に捉えて「見るたびごとに自然と古のことが思われて」と解するものが多いからである。確かに「見るごとに一思ほゆ」の形式は集中幾つか例がある。

葦辺行く 雁の翼を 見別 君が帯ばしし 投矢し所思 (巻13・3345 挽歌)

ぬばたまの 飛弾の大黒 毎見 巨勢の小黒し 所念かも

(巻16・3844 「嗤-咲黒色-歌」)

なでしこが 花見流其等尔 娘子らが 笑まひのほひ 於母保由流かも

(巻18・4114 家持「庭中花作歌」)

しかしながら、「見るごとに一思ふ」も、集中他に一例のみだが、

春日なる 三笠の山に 居る雲を 出で見毎 君をしそ念

(巻12・3209 「悲-別歌」)

と見える。この「念」は「思ほゆ」とは異なって意志的な行為であり、三笠山にかかる雲を見るたびごとに、それをよすがとして遠く離れたところにいるあなたのことを思うようにしている、というのである。赤人歌の場合、古都明日香の景を見るたびごとに失われたものへの思慕の情が引き起こされるのだが、「古思へば」は、それをあらためて自らの意志で「古」を「思ふ」こととして捉えなおす。「古」を自らの想念の中に意識的に回復しようとするのである。この「古」への意志的な対し方と、先述の、長歌の構成の中で末尾の「古」に全体が収斂するように詠まれていることとは、まさに見合っている。

3.

次に、その「見るごとに」の対象である古都明日香の景がどのように表されているか見てみよう。長歌の中間部Bがそれにあたる。

山高み	川とほしろし
春の日は 山し見が欲し	秋の夜は 川しさやけし
朝雲に 鶴は乱れ	夕霧に かはづは騒く

というように、明日香の現在のありようが山川の対偶を軸に対句を駆使して表される。この山川の山は、Aの描写を承けて神奈備山を一つの象徴とする明日香の山々を指し、川は反歌にあるように神奈備山を廻り流れる明日香川を指すと見てよい。その山川という空間上の対比を軸に、時間的な対比、春と秋、日と夜、朝と夕という対比が織り込まれていく。この時間的対比は、言うまでもなく一日中、一年中という全体を表す永続性の表現である。

そして、山川を「高し」「とほしろし」と広大さをいうのは土地讃めの表現。また「見が欲し」「さやけし」というのも、金村の吉野宮讃歌(巻6・907)に類似の表現があるように典型的な宮讃めの表現である。また「雲」「霧」のような湧き立つものを描くのは、その土地の豊かさを讃美する表現。「鶴」や「かはづ」の動的な様は、決して乱雑さを表

すのではなく活気溢れる自然の賑わいを言ってこれも讚美の表現である。このようにBの部分は、清水克彦氏が「称美」と言われたように(7)、徹底した讚美の表現をとる。その広大で清らかで生命力を湛えて永続する景は、吉野宮讚歌からもわかるようにとりもなおさずそこが都であることを示す。つまり、明日香はこのとき「古き都」なのだけれど、その景には年月の経過による変化はみじんもうかがえず、都としてふさわしい美しさと永続性を備えていると赤人は表しているのである。現実には明日香が廃都後どうなったのか、放置されたのか、ある程度管理されたのかということに拘わらない、観念的な景である。梶川信行氏はこの景を「ありうべき景」と言われたが(8)、重要なのは、赤人がこの景を想像上の理想的な姿として描いたのではなく、いま目の前にありありと見えている景として描いたことである。そしてそのように眼前に明瞭に景が見えていながら、そこに失われたもの、その景を内部から満たして価値づけていたものを思っている。それが「古^{いにしへ}」である。Bに描かれる景の美しさは、複製品を目の前にしたときに感じるような、言わば空虚な美しさである。

4.

さて、このような明日香について将来にわたる誓いを述べて祝福するのがAの部分である。Aの部分は、「三諸の 神奈備山に」で場所を提示し、次に「五百枝さし しじに生ひたる つがの木の」及び「玉かづら」とその場所の囑目の景物を取りあげ、それを序として「いや継ぎ継ぎに」「絶ゆることなく」を導き出して文脈を転じ「ありつつも 止まず通はむ」にかけて、冒頭以下それら全体を「明日香の 古き都」に修飾させるという構造である。このAの部分の構造と表現が、前掲の金村の吉野讚歌のA、

瀧の上の 三船の山に みづ枝さし しじに生ひたる とがの木の いや継ぎ継ぎ
に 万代に かくし知らさむ み吉野の 秋津の宮は……

と密接な関係にあることは既に指摘されているとおりであり(9)、これらに共通する「つ(と)がの木の いや継ぎ継ぎに」が人麻呂の近江荒都歌に倣うものであることも見易い(10)。

Aの「在管裳 不止將通^{ありつつも 止まずかまほむ}」は、神奈備山の囑目の景物を比喻として都に恒久的に「通ふ」ことを誓う。それは単に風光の美しさを賞でて言うのではない。相聞を別にすれば、

やすみしし わご大君の 高知らす 吉野の宮は……その山の いやますますに
この川の 絶ゆることなく ももしきの 大宮人は 常將通^{つねにかまほむ}

(巻6・923 赤人 吉野宮讚歌)

……寒き夜を 息むことなく 通ひつつ 作れる家に 千代までに いませ大君よ
我も通武^{かまほむ}

(巻1・79 寧楽宮讚歌)

やすみしし 我が大君 高光る 日の皇子 しきいます 大殿の上に ひさかたの
天伝ひ来る 雪じもの 往來乍^{ゆきかまほむ} いや常世まで

(巻3・261 人麻呂 「獻_新田部皇子_」)

……帯ばせる 泉の川の 上つ瀬に 打橋渡し 淀瀬には 浮橋渡し 安里我欲比
仕へ奉らむ 万代までに (巻 17・3907 境部老麻呂「讚_二三香原新都_一歌」)

の諸例のように、恒久的に「通ふ」と言うことは、奉仕の誓いでありかつそれを通して対象を讃美する表現である(11)。ただし、これらの「通ふ」先には、離宮であれ大君がいるということが前提となっているが、赤人歌には明日香の地に大君が存在することを示す表現はどこにもない(12)。Bの部分ではそこが都としてふさわしい美しさと永続性を備えていると詠まれたが、そこを支配する者の姿を窺うことはできない。「古き都」と詠むように、そこにいまや天皇がいなつまり統治の中心地ではないということについて当然、赤人は明確な認識をもっていただろう(13)。先に、Bの部分について、赤人は眼前にありありと景が見えていながら、そこに失われたもの、その景を内部から満たして価値づけていたものを思っていると述べた。美しいけれども何か決定的なものが失われていると感ずる、その空しさのよってきたところが、この天皇の不在ということと関わるのではないか。

Cの部分をもう一度見てみよう。「見るごとに 音のみし泣かゆ 古思へば」の「古思へば」は、漠然と明日香が都であったときのことを思うという意ではない。次の歌は、これに類似する末尾をもつ。

古の ますら男の 相競ひ 妻問ひしけむ 葦屋の 菟原処女の 奥つ城を 我が
立ち見れば 永き世の 語りにしつ 後人の 偲ひにせむと 玉杵の 道の辺近
く 岩構へ 作れる塚を 天雲の そきへの極み この道を 行く人ごとに 行き
寄りて い立ち嘆かひ 或る人は 啼_二毛_一哭_二乍_一 語り継ぎ 偲ひ継ぎ来る 処女ら
が 奥つ城所 我さへに 見_二者_一悲_二喪_一 古_一思_二著_一

(巻 9・1801 田辺福麻呂歌集「過_二葦屋処女墓_一時作歌」)

この「古思へば」の「古^{いにしへ}」は、眼前の墓から想起される葦屋処女と二人の「ますら男」にまつわる一連の出来事を指す。「見れば悲しも」は、その悲劇的な結末を迎えた出来事を想起して、若くして失われた三人の命を思つての悲嘆である。挽歌的な情と言ってよい。これと同様、赤人歌の「古^{いにしへ}」も具体的な出来事を指すのであり、かつ明日香の地の神話的な始原の時を指すのだとすると、それは上野誠氏(14)などによって言われてきたように天武天皇の事跡以外には考えがたい。それが、赤人の個人的な感慨でないことは、

……鳥網張る 坂手を過ぎ 石橋の 神奈備山に 朝宮に 仕へ奉りて 吉野へと
入ります見れば 古思ほゆ (巻 13・3230)

のような、明日香の地での天武持統朝への懐古のあり方から見て明らかだろう(15)。

現在も未来も都であり続けるような、明日香の美しい景を見るたびごとに、それを価値づけていたもの、具体的には天武天皇による都の創始とそこで行われた天武天皇の偉業という一連の出来事を思うというのである。先に、この歌が全体には、時間の流れを遡行して「古^{いにしへ}」に帰着しようとする構成をもつと述べた。この「古^{いにしへ}」への強い志向は、天武朝

への思慕ということを踏まえてはじめて正確に理解されよう。そして天武天皇のいた「古」、その時代精神を回復しようとしてもできない現実に直面して「音のみし泣かゆ」という悲嘆が生じる。

赤人は、明日香の景を都にふさわしい景として讃美する一方、それを価値づけていたもの、天武朝がもはや過ぎ去って存在しないことを明瞭に認識している。それを「古」を思うことで自己の内部に回復しようとするのだけれども、ついにはかなわないことを知り悲嘆する。人麻呂の近江荒都歌のように、荒廃した古都の景の中にかつての都を幻視しようとするのではなく、かつての都の幻視がありありと見えていてそれを内側から支える価値的なものを求め回復しようとするところに、人麻呂歌とは大きく異なる、この赤人歌の一種の観念性が認められるように思われる。

注

- (1) 上野誠氏『古代日本の文芸空間—万葉挽歌と葬送儀礼—』「故郷・飛鳥思慕の文芸」（雄山閣、1997年11月）
- (2) 芳賀紀雄氏『萬葉集における中国文学の受容』「望郷」（塙書房、2003年10月初出1972年）
- (3) この「堵」は『説文解字』に「堵 垣也、五版為堵、从土者声」とあるように原義は垣。これを都の意で用いることについて木村正辞『萬葉集訓義弁證 上』は同音で「閼」「都」に通用させたとする。『毛詩』小雅・斯干に、宣王が宮室を成したことを歌って「築室百堵 西南其戸」とある。その「堵」は、版築でつきかためられた屏風のことで、「百堵」は多くの宮室を意味する。この一節を典拠として漢籍では「百堵」でもって多くの宮室をいうことがしばしばあるので、そこからの連想が働いた可能性も考えられる。
- (4) 清水克彦氏『萬葉論集 第二』「養老の吉野讚歌」（桜楓社、1980年5月、初出1974年）
- (5) 清水克彦氏『萬葉論集 第二』「赤人における叙景形式の変遷—仮称「原赤人集」の構造から—」（桜楓社、1980年5月、初出1977年）
- (6) 清水氏も前掲注(5)論文において、別の側面からこの歌が見レバ型の要素をもちつつ、八型の、より客観的な景の叙述に傾いていることを述べておられる
- (7) このことに関わって、清水克彦氏はかつて「称美と悲嘆—赤人の神岳の歌について—」（『女子大國文』106号、1989年12月）において、長歌が「称美」と「悲嘆」に分裂していると述べられたことがある。中間部の明日香の風景の詠み方に見られる「称美」の情と、末尾の「音のみし泣かゆ」に見られる「悲嘆」の情とが、直接に関連をもたず平行する二つの情として詠まれているというのである。しかしそれが決して分裂しているのではないことは後述のとおりである。

- (8) 梶川信行氏「赤人の《芸》—「登神岳」歌の場合—」（『万葉史の論 山部赤人』翰林書房、1997年10月、初出1990年）
- (9) 清水氏前掲注(4)論文
- (10) 小島憲之氏『上代日本文学と中国文学 中』第五篇第五章「萬葉集と中国文学の交流」塙書房、1964年3月）
- 鉄野昌弘氏は「山部赤人「登神岳」作歌」試論」（『叙説』37号、2010年3月）で、「都賀乃樹乃 いや継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆることなく」の部分について、新しい見解を示された。人麻呂がツガノキを『毛詩』国風・周南の「南有_レ 樛木_レ 葛藟_レ 之_レ 樂只君子 福履綏_レ 之」という一節に基づき「樛木」と表記したこと（巻1・29）を踏まえて、赤人は「つがの木」と「玉葛」をとともに詠み、それによって、皇統の連続と繁栄への讃美を表すだけでなく、その恩沢を受けて臣下が奉仕を続けることを比喩的に表した、と言われる。その場合「つがの木」は漢語「樛木」のように臣下に恩沢を与える君主の比喩と捉えられるわけだが、しかし歌において「つがの木の いや継ぎ継ぎに」は「止まず通はむ」にかかって臣下の奉仕の永続を比喩的に表す。小島憲之氏が指摘されたように赤人が人麻呂による『毛詩』の利用を意識していたことは確かだが、その典拠にそってAの部分に歌の文脈と齟齬するような文脈が別に形成されていたとまでは考え難いのではないか。
- (11) 「通ふ」という表現が、明日香が大君のいる都であることを前提とした表現であったとすると、下級官人を除いて本来都城に居住する官人の行為として矛盾する。「都」とはいえ、その原義ミヤ+コに即して天皇の居住空間であるミヤを中心に捉えられていると見た方がよいか（例えば3907番歌）。或いは、「通ふ」ということがその主体の住まいがどこであるかにかかわらず讃美表現として類型化していたと見るべきかもしれない。
- (12) 梶川氏前掲注(8)論文。
- (13) 高松寿夫氏「山部赤人「神岳作歌」—王権不在の廢都歌—」（『上代和歌史の研究』新典社、2007年3月、初出1992年）
- (14) 上野氏前掲注(1)論文。
- (15) 本稿は当該324番歌と3230番歌との懐古の質に近似するものを認めるが、そこから前掲注(4)清水氏論文や太田豊明氏「神岳に登る歌と春日野に登る歌」（『セミナー万葉の歌人と作品』第七巻 和泉書院、2001年9月）のように、当該歌が吉野行幸の往路において作られた儀礼歌であるとは考えない。